

## 推薦文案の書き方メモ

加藤雄一郎

2022/7/23

アメリカの大学院に出願する際には reference letter あるいは recommendation letter が必要になります。いわゆる推薦状です。当たり前のことですが、推薦状は推薦者本人が書くべきもので、出願者が指導教員などに依頼して書いてもらいます。アメリカでも出願者が書いて欲しいことについて簡単なメモを準備することはありますが、日本だと推薦者から文案を準備するように指示されることが少なくありません。書き方が分からなくて困る人も多いと思います。[2015年の米国大学院生学生会ニュースレターの記事](#)の内容に加えて、以下のポイントにも気をつけて書くと良いでしょう。

- 推薦文は主観的な表現より事実を優先しましょう。美辞麗句や褒め言葉は最小限に。
- 推薦文を読む審査員の先生たちは、場合によっては百通以上の推薦状を読まなければいけません。忙しい人たちなので、速読しながら読む必要があるかを瞬時に判断して審査していきます。読んでいて情報密度が薄い、と思った瞬間にその段落は飛ばしますし、それが続いたりする場合はその推薦状を飛ばします。
- 情報密度とは、つまりはどのくらい具体的なことが書いてあるか、ということです。他の人の推薦文に使い回せるような褒め言葉しか書いていない文には、被推薦者に関する情報はゼロです。
- 審査員からすると、主観的な記述にはあまり価値はありません。むしろ、事実を確認して自分の尺度で評価するわけです。記述が大雑把すぎて、実際何をやっているか、どんな状況なのか、が分からないとやはり情報量が少ない、ということになります。
- きちんと読んでほしければ、書く方もきちんと書かなければいけません。情報密度が薄い推薦文というのは、「読み飛ばしてください」と暗に言っているようなもので、逆に具体的なことがぎっしり詰まっていれば良い学生なので本気で書いたということが分かります。普通は、書いている人もよく審査しているのでここは阿吽の呼吸です。でも、日本の先生たちは慣れていない上に学生に原稿を書かせるので、そこで損をしないように気をつけましょう。